

[研究論文]

人間関係に関する議題を話し合う学級会を実施した担任の指導観  
 ～小学校教員へのインタビュー調査を通して～

Guidance view of the homeroom teacher who held a class meeting to discuss the agenda related to human relations  
 ~ Through an interview survey with elementary school teachers ~

脇田 哲郎  
 Tetsuro WAKITA

福岡教育大学教職実践ユニット

本研究は、K市とN市の6年生で行われた学級会をもとに、子供たちの日常生活に見られる人間関係に関する問題を取り上げることによる学級担任がどのような指導観を保持しているのかを明らかにすることを目的に行った。研究は、2人の学級担任に、「なぜこのような議題で話し合わせたのか」「学級会までの手続きや子供との関わり」「この議題を話し合っただけで学級はどのように変わったのか」の3点についてインタビューしたものを木下（2003）修正版グラウンテッド・セオリー・アプローチの手法を参考に分析を試みた。その結果「なぜこのような議題で話し合わせたのか」では「担任の児童観」「議題が生まれた背景」「子供が本気で話し合う議題」の概念が、「学級会までの手続きや子供との関わり」では「子供や保護者への関わり」「子供の内面を知る」の概念が、「この議題を話し合っただけで学級はどのように変わったのか」では「学級会での学び」「学級会後の変化」「学級会での成長」という概念をそれぞれ明らかにすることが確認できた。

キーワード：人間関係に関する議題，学級会，学級担任の指導観，インタビュー，M-GTA，概念

1 問題と目的

(1) 人間関係に関する議題

① 学級会の議題について

報告者が平成28年度から令和元年度までに参観した116の学級で実施された「学級会」の議題は、図1に示す通り、その殆どが「学級集会を開こう」

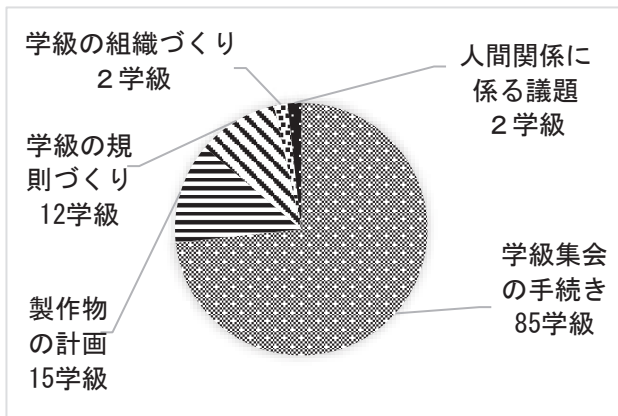


図1 学級会の議題の種類

などの学級集会の手続きが85学級、学級の旗や歌などの製作物を作るための計画に係る議題が15学級、学級の決まりなどをつくる議題が12学級、学級の係などの組織づくりに関する議題が2学級、そして、いじめなどにつながる学級の人間関係に係る議題は2学級であった。このように、現在の学級会で話し合われる議題は「学級集会の手続き」が圧倒的に多い。学級集会の手続きについて話し合った学級担任に、なぜこの議題で話し合ったのかと尋ねると「話し合わせやすい」「学級会の授業を公開しなければならぬから」という回答があったが、この回答にこそ学級会に対する担任の捉え方の問題がある。

学級会は、学級活動(1)の活動内容である話し合い活動の通称である。平成元年度の改訂によってこれまでの学級会活動と学級指導が統合されて新設された教育活動である。この学級会は、児童生徒の自発的、自治的活動をその特質とする。つまり、児童生徒が自分たちで学級生活の向上に関する課題を見つけ、話し合い、友達と協力して話し合いで

決まったことを実践する活動である。この特質からすると、話し合わせやすいから、授業を公開しなければならぬから学級集会の手続きを話し合わせたという担任の回答には問題がある。

表1 学級活動の目標

第2 各活動・学校行事の目標及び内容 小学校〔学級活動〕 中学校〔学級活動〕 1 目標 <u>学級や学校での生活をよりよくするための課題を見だし、解決するために話し合い、合意形成し、役割を分担して協力して実践したり、学級での話し合いを生かして自己の課題の解決及び将来の生き方を描くために意思決定して実践したりすることに、自主的、実践的に取り組むことを通して、第1の目標に掲げる資質・能力を育成することを目指す。</u> 下線は報告者
--

表1は、小学校・中学校学習指導要領(平成29年告示)(以下、学習指導要領)に示された学級活動の目標である。下線の部分が学級活動(1)「学級や学校の生活づくりへの参画」にあたる内容である。この内容は、学級生活の向上を目指して話し合ったり役割を分担したり協力して実践したりする活動であることが示されている。

## ② いじめ等の諸課題について

文部科学省(以下、文科省)は、2021年度の「児童生徒の問題行動・不登校生徒指導上の諸課題に関する調査結果の概要」を公表した。(表2)

表2 児童生徒の問題行動・不登校生徒指導上の諸課題に関する調査結果の概要(2021, 文科省)

諸課題	令和2年度	前年度	増減
いじめ認知件数	517.163件	612.496件	15.6%減少
不登校児童生徒数	196.127件	181.272件	8.2%増加

コロナ禍の状況の中で、いじめの認知件数は減少している。コロナ禍で学校に行かない日が多く続いたことが理由の一つに挙げられているが、友達と会わないからいじめが減少したというのもおかしい理由である。また、不登校児童生徒数は、学校に行かないことに慣れてしまっていて増加したというが、これも新型コロナウイルス感染拡大の中であっての特徴的な傾向と言える。と考える。

学習指導要領小・中・高等学校の解説特別活動編(以下、特活解説書)には以下の内容が示された。ここには、学級経営を充実させる具体的な方策が、学級活動(以下、学活)とホームルーム活動(以下、HR活動)の自発的・自治的活動である

「学級<ホームルーム>活動における児童(生徒)の自発的、自治的活動を中心として、各活動と学校行事<各活動・学校行事>を相互に関連付けながら、個々の児童(生徒)についての理解を深め、教師と児童(生徒)、児童(生徒)相互の信頼関係を育み、学級<ホームルーム>経営の充実を図ること。その際、特に、いじめの未然防止等を含めた生徒指導との関連を図るようにすること。( ) 中高の内容、< > 高の内容

ということが示されている。そして、そのことが、いじめ等の生徒指導上の問題も未然に防げるのだということも示しているのである。このことは、特別活動への大きな期待である。

いじめを受けて苦しんでいる児童生徒や保護者にとっては、教育課程に位置づいており時間割には「学級活動」と表記されていることの多い時間の充実がいじめを改善してくれるのだということになれば、特別活動への期待は計り知れないものである。ここに示されている、学級活動における自発的・自治的活動とは、児童生徒が自ら話し合ったり、目標や方法を決めたり役割分担をしたりして、学級の友達と協力して実践する話し合い活動や、係活動、学級集会活動のことである。

しかし、全ての学級活動が学級経営の充実やいじめの未然防止につながるかというとそうではない。図1で示したような学級集会の手続きだけを話し合っている学級会や教師が話し合いの内容を与えている学級会では、その効果は期待できない。

## (2) 人間関係に関する議題を話し合う学級会

どのような学級会が学級経営の充実やいじめの未然防止につながるのだろうか。以下に紹介する2つの学級会では、学級の人間関係から生じた問題を話し合っていた。この人間関係に関わる問題を議題とする学級会は、学級集会の手続きを議題とする学級会等でよく見かける。「子供たちの課題意識が見えない。」「子供たちの本音が聞こえてこない。」そんな学級会ではなかった。子供たちが自分の思いを懸命に伝えようとしていた。

### ① 2017年12月に実施されたK市立H小学校の第6学年X組の学級会の概要と担任の指導の意図

表3に示すように学級会の議題は「みんなが安心できるクラスにしよう」であった。

提案理由は「クラスで発表するときに、ニヤニヤしてとなりの人とこそこそ話をして、クラスの人がいやな思いをしているので、そんなことをな

くしたいから。」というものであった。

本議題が生まれた背景について担任に聴取すると、次のような説明があった。「2学期も間もなく終了しようとする頃、『男子の何人かが、女子が発表するときにニヤニヤ笑ったり、隣の人と顔を見合わせてコソコソと話したりするようになった。とても嫌な思いをしているので、そのような行為はやめてほしい。この学級でのいい思い出をもって卒業したい。』という訴えが数人の女子から担任にあった。」ということであった。

さらに担任は、「この学級の子供たちは、これまで学級集会なども計画してみんなで協力して実践してきており、人間関係もより良いものになってきているので学級会の議題として取り上げ、学級全員でこの問題について協議しても大丈夫だという確信があった。」とも語った。そして、「この問題をこのままにしておくで学級の雰囲気が悪くなり、私に訴えてきた女子たちの担任への信頼も崩れると考えた。」ということであった。

表3 K市の学級会の概要

議 題	みんなが安心できるクラスにしよう
提案理由	クラスで発表するときに、ニヤニヤしてとなりの人とこそこそ話をし、クラスの人がいやな思いをしているので、そんなことをなくしたいから。
本議題が生まれた背景	2学期も間もなく終了しようとする時、男子の何人かのふざけた行為が見られるようになった。その時、女子からそのような行為はやめてほしい。いい思い出をもって卒業したい。という意見が出され学級会の議題として取り上げられた。
担任への聴取	1学期から学級会は実施してきており学級集会なども経験してきている。その結果、男女関係なくなんでも言える人間関係が育ってきていると判断したので、計画委員会と話し合っで学級会の議題として取り上げることにした。

## ② 2020年12月に実施されたN市立N小学校の第6学年Y組の学級会の概要と担任の指導の意図

表4に示すように議題は「学級の問題を解決しよう」であった。

提案理由は「休み時間に一人の人がいます。また、RとTと関わっていません。誰一人悲しい思いをしないで、27人みんなが楽しいと思えるクラスにしたいと思い提案しました。」であった。

本議題が生まれた背景について担任に聴取すると「10月にRとTの双子の兄弟が転校してきた。子供たちは大喜びで、歓迎会を開いて迎えた。しかし、発達障害の診断が出ていた弟のRは、怒りっぽく、カッとなると暴力を振るったり椅子を振り上

げたりするようになり、次第に学級の友達と疎遠になってきた。そのような時に、あんなに歓迎したのにRと関わらないのはおかしい。Rのことを知らないでRと距離を取っているのは学級全体の問題だと、女子の日記に書かれていたので、このことを議題化した。」というような説明があった。さらに、RとTの転校もRの起こした問題が原因で前の学校に居づらくなったということだった。

表4 N市の学級会の概要

議 題	学級の問題を解決しよう
提案理由	休み時間に一人の人がいます。また、RとTと関わっていません。誰一人悲しい思いをしないで、27人みんなが楽しいと思えるクラスにしたいと思い提案しました。
本議題が生まれた背景	10月にRとTの双子の兄弟が転校してきた。子供たちは歓迎会を開いて迎えたのだが、怒りっぽいRは次第に暴力を振るうようになり学級の友達と疎遠になってきた。Rのことを知らないでRと距離を取っているのは学級全体の問題だということで議題化された。
担任への聴取	Rと学級の子供たちに、今後どのように関わっていけばいいのか話し合わせることでその他の子供たちとのより良い関わり方についても考えるようになることを期待したので学級会の議題として取り上げることにした。

以上2つの学級会は、学級内の児童の人間関係に関わる問題を話し合っている。学級会は、自発的、自治的な活動であっても教師の適切な指導がなければ話し合い活動として成立しない。

野中(2022)は、学級担任の学級活動(1)に関する実践的指導力には、子供たちの自主的な活動を促進したり子供の問題意識を高めるために支援したりするなどの「自発性促進」と計画委員会への指導や議題の集め方や選定の仕方の指導ができるなどの「自治性マネジメント」の2つの因子があることを述べている。ただ、これらの実践的な指導力を身につけているだけで、学級経営の充実やいじめの未然防止につながる学級会を実施できるのだろうか。

そこで、2つの学級会を実施した担任へのインタビューを通して、担任としての指導観を明らかにしていこうと考えた。

## 2 研究

### (1) 研究の方法

#### ① 対象

K市とN市の学級会を公開した2人の公立学校教員である。2021年度は、K市の教員は、K市役所主査、N市の教員は、N小4年生の担任をしている。

## ② データの収集方法と質問事項

2021年10月30日に実施した、特別活動の研修会（オンラインによる）で、インタビューしたものをレコーディングし、後で、逐語録として文書に起こした。時間は、2時間の研修会の中で、一人概ね40分の回答であった。

この日の質問は、メインの司会者から「なぜこのような議題で話し合わせたのか」「学級会までの手続きや子供との関わり」「この議題を話し合っただけで学級はどのように変わったのか」の3点について回答してもらった。他に、参加者からの「クラス担任として大切にしていること」「自分の思いをしっかり表現できるようになるプロセス」「子供たちが意思決定したことは何か」「人間関係の議題を学級会で扱うときの基準」「話し合いが終わった後のフォローについて」「自分の課題に気づいていない子供にどうすれば気づかせることができるか」「議題の集め方」「中学校に進学した子供たちには、この経験が生きているのか」についても答えている。

## ③ 研究による倫理的配慮

対象者には、事前に研究の目的、方法、研究の参加並びに中断における個人の自由意志の尊重、データの使用範囲について口頭で説明し、了承を得た上で実施している。なお、逐語録及び研究結果については、後日対象者に内容の確認を依頼している。

## ④ 分析方法

本研究では、学級会の議題に「子供たちの日常生活に見られる人間関係に関する問題を取り上げること」をよしとする学級担任の指導観を調査するために、木下(2003)の修正版グラウンテッド・セオリー・アプローチ（以下、M-GTA）を参考にインタビューの逐語録を分析した。

M-GTAは、データとの確認を継続的に行いながら解釈を確定していくので、質問紙調査のようにデータを収集、入力しそれに対して分析を行い、結果を得るといった段階的な形とは根本的に異なるデータに密着した分析法であるので、本研究の分析には最適だと考えた。分析は、2名の学級担任に対して行ったメインの3つの質問に対する回答を分析した。なお、分析に基づいた論文の作成については、鶴田(2021)を参考にした。

## (2) 研究の実際

M-GTAの分析法を参考に、3つの中心質問に対して8つの概念を設定した。図2は、その結果を表したものである。

人間関係に関する議題を話し合う学級会を実施した担任の思考について述べていく。

### なぜこのような議題で話し合わせたのか

この質問に対して、まず、「この子たちなら大丈夫」だという担任の児童観があった。その根拠は、これまで実施してきた、学級集会係や係活動の中で友達や人を大切にすることを考えさせてきたということにあった。だから、暴力的な男子の対応の仕方について話し合っても、この子達なら受け入れてくれると考えていた。

#### 表5：担任の児童観（No1：N市の教員）

集会活動とか係活動とか繰り返し行って、友達を大切にすることとか、人を大切にすることってどういうことかをいっぱい考えてきたから、

次に、話し合った議題が子供たちがどうしても話し合いたいというものだったからという考えがある。

#### 表5：議題が生まれた背景（No2：K市の教員）

子どもたちが話し合いたいというか、この問題を解決したいっていう思いからこの議題を学級会で取りあげる

このような思考をする教員には、学級会の議題は、子供たちが自分ごとだと思うものでないといけな。そうでなければ本気になって話し合えないという学級会の議題に対する理解があった。

#### 表5：子供が本気で話し合う議題（No2）

自分とすごく関わりのあることだっていうのをクラスの子どもたちが思っていないと話し合いをしている時にどうしてもよそ事っていうか、本気になって話し合えない

以上のことから、人間関係に関する議題を話し合う学級会を実施する教員は、児童が自発的に行う集会活動や係活動の教育的な効果や議題のあるべき姿に対する理解が深い事がわかる。

### 学級会までの手続きや子供との関わり

学級会の前に担任として行ったことは、子どもや保護者に対しての説明である。人間関係に関する議題で学級会を実施する場合、その内容が個々の子どもに関する事項を話し合う事がある。その場合は、対象の子供や保護者に対して丁寧に説明をしておかなければならないと、担任は考えている。

#### 表6：学級会までの手続きや子供との関わり（No1）

R男としっかり話をして、その後、お家の人にも、子どもたちで解決させていってもいいですかという承諾をもらいにきました。

子供たちの人間関係に関する議題だから何でも話し合えば良いということではなく、話の内容によっては、子供が傷つく事があるかもしれない、保護者は触れてほしくないと思っているかもしれ

ないという細かな教育的な配慮に基づいた行動が担任に求められると考える。

また、学級会は、児童の自発的、自治的な活動だからといって教師が何もしないということではない。この議題を話し合っ解決すればこの学級はどのように成長するのかという学級会の授業構想を持っておく必要がある。そのことを、K市の教員は「プランニングシート」を活用しながら学級会を構想している。それだけではなく、学級会のお世話をする計画委員会にも児童用プランニングシートを活用させて見通しを持たせている。プランニングシートとは、報告者が作成した学級会授業構想援助シートである。

表6：子供や保護者への関わり (No2)

学級会をする時には、プランニングシートを使っているのですが、そのスタートのところに今のこの学級の状態をもう一回見つめて、子どもたちが自分の言葉で書いていく・・・

学級会の議題は、教師が与えるものではなく、子供たちの生活から生まれるものであると理解している担任は、日頃から子供たちの内面を知る努力をしている。

表6：子供内面を知る (No1)

自分は日記をしています。日記の中にR男のことがよく出て来るようになった

表6：子供内面を知る (No2)

子どもたち同士で話している場面の声を盗み聞きするって言うか

2人の担任が日頃に行っていることは、子供の日記に書かれた内容や子供同士で話している内容から子供たちが何を今問題だと思っているのかということを知る努力である。梶田(1994)は、子供一人ひとりの内面にあるものを見とる手がかりに「子供のつぶやきやささやきに耳を傾けること」「子供のワークシートやノート等の記述内容を点検すること」としているが、2人の担任が、そのような子供の内面世界を知る方法をどこの段階で取得したのかは、今後さらに情報を収集していきたい。これらのことから、担任は、学級会までに子供たちの内なる声を把握しようとする努力をしながら、学級会の話し合いの対象となる児童やその保護者との綿密な打ち合わせをおこなっている。また、学級会の授業構想をプランニングシートを活用して見通しを持って指導にあたっている。

#### この議題を話し合っ学級はどのように変わったのか

この学級会を通して児童は、これまで暴力的な言動をしていたR男の本当の気持ちを知る事がで

きた。また、女子を困らせていた男子は、女子の怒りは本気だったのだということに気付いた。

表7：学級会での学び (No1)

R男は、気持ちが抑えられないことがあることや友達が減っていくのが怖いと思っていること、みんなと仲良くしたと思っていることが分かった

表7：学級会での学び (No2)

周りの子供の本気度ってというか、本気で怒っているなとか、これ以上したらもうだめだな、ここを越えてはいけない

このように、話し合いの対象となった子供の特性を知ることで、人間は分かっていると思うようにならない事があることを学ぶ。また、人の怒りに触れて、自分はふざけたつもりでも相手はそう受け取らない事があるということも学ぶ。子供たちの話し合いの中や後の言動を見て担任は、人間関係を議題にする学級会の価値をそこに見出すのである。そして、人間関係に関する議題を話し合っ学級は、他の児童との関わりも良好なものにしようとする事が分かる。

表7：学級会後の変化 (No1)

これまで関わっていなかった人ともしっかりと関わっていく

表7：学級会後の変化 (No2)

一部の子のAへの関わりじゃなくて、学級としてのAへの関わりというのがAの居心地をよくした

このように、R男の暴力的な言動を話し合っ子供たちは、これまで関われなかった友達と積極的に関わる集会を計画したことが分かる。また、友達に迷惑をかけていた男子に対する学級成員の承認や賞賛などの肯定的な関わり方に変わったことで学級内の人間関係もより良いものに変化したことが分かる。そして、学級会で暴力的な言動について語ったR男は、中学校でもよりよく生活をしていたりふざけた行動に怒りを示した学級では、友達の成長を喜べるようになったりするなどの成長がみられるようになったと話している。

表7：学級会での成長 (No1)

みんなと一緒に中学に行けています。あの学級会があったからとかではないかのですが、今は、仲間外れとかは起きていないと思っています。

表7：学級会での成長 (No2)

Aが変わることを周りの子たちも嬉しかった、自分ができるようになったとかではなく、友達ができるようになったことを一緒に喜べるようになった

二人の担任は、学級会を通した子供の成長に手応えを感じていると考える。

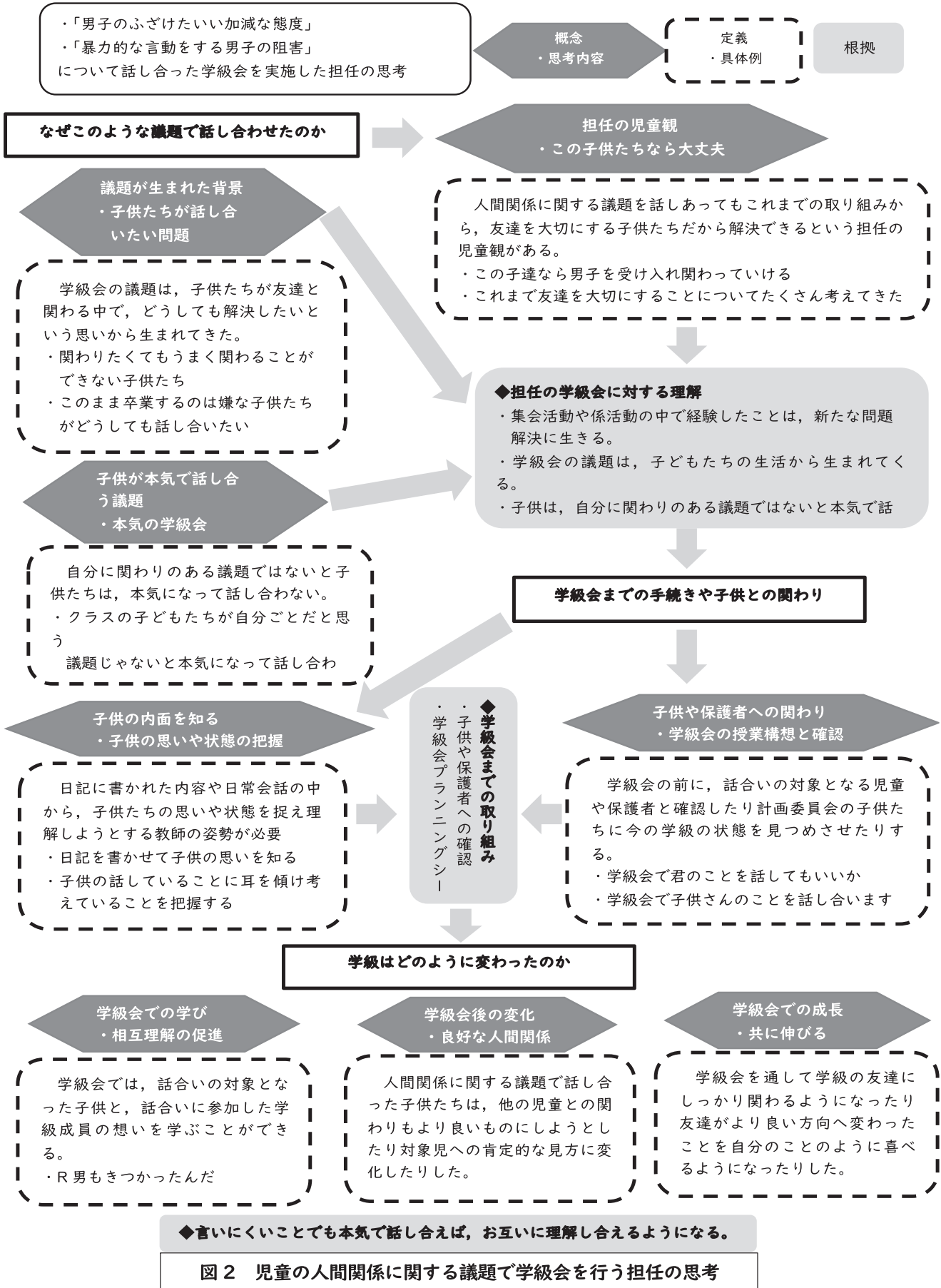


表5 「なぜこのような議題で話し合わせたのか」の概念、定義、具体例

概念	定義	具体例
担任の児童観	人間関係に関する議題を話しあってもこれまでの取り組みから、友達を大切にすることから解決できるといふ担任の児童観がある。	No1 「この学級の子どもたちなら、この男の子のことも一緒に仲間として受け入れたり友達として関わってあげる」 No1 「この学級の子ども達は、人間関係のトラブルとかいっぱいあったけど、集会活動とか係活動とか繰り返し行って、友達を大切にすることとか、人を大切にすることとかをいっぱい考えてきたから、この子たちなら解決できると思ってる」
議題が生まれた背景	学級会の議題は、子供たちが友達と関わる中で、どうしても解決したいという思いから生まれてきた。	No1 「10月の下旬に双子が転入してきて、みんなで歓迎会の計画を立て、この双子の子と関わるようにしていたが、暴力的なところが少し目立ってきて、ちょっと怖いという子供たちが出てきた。でも、放課後とか休みの日とかも一緒に遊んで関わろうとしたのだけど…。双子の子たちも自分たちはちょっとなじめないというか、関わるとまた暴力的なところがあつたら友達が引いていくのではないかというのがあって、関わりたいけど上手く関われないっていう時に、出てきた問題だった。」 No2 「6年生の後半でしたので、子どもたちが提案理由の中にもあつたように、このまま卒業っていうのがすごくいやだと言う思いでした。実際は子どもたちが話し合いたいというか、この問題を解決したいっていう思いからこの議題を学級会で取りあげるっていうことになりました。」
子供が本気で話し合う議題	自分に関わりのある議題ではないと子供たちは、本気になって話し合えない。	No2 「決してこちら側が、話し合わせようとか、話し合いなさいとか言うことではなかったです。議題を取り上げる時に、その議題が自分とすごく関わりのあることだっていうのをクラスの子どもたちが思っていないと話し合いをしている時にどうしてもよそ事っていうか、本気になって話し合えないんじゃないかなっていうのは自分の経験の中から感じている。」

表6 「学級会までの手続きや子供との関わり」の概念、定義、具体例

概念	定義	具体例
子供の内面を知る	日記に書かれた内容や日常会話の中から、子供たちの思いや状態を捉え理解しようとする教師の姿勢が必要	No1 「自分は日記をしています。日記の中にR男のことがよく出て来るようになった子がいて、遊んでいる時にぎつい言葉をかけられた、だからといって一緒に遊ばなくなったら自分がしてることはちょっと違う気がするって書いていた。他にもこういう思いをしてる子っているのかなと自分も気になり、聞いてみたら何人かちょっと気になるとか、ちょっと関わりづらくなってるって言う子がいました。」 No2 「例えば日記であるとか自学のノートに書いてくる子もいます。私は何より大事だと思ってるのは、教室にいる時に、子どもたち同士で話している場面の声を盗み聞きするって言うか「この子たち今このことについて違和感を持ってるんだなあ」とか、子どもたちの気持ちからすごく現れる行動というのをどれだけ担任として目撃捉えているのか、そのことについてもうちょっと突っ込んで話を聞いたり先生自身の子どもたちの思ってる事とか状態を捉えたりするかっていうか、感性というかそういうのってすごく大事じゃないかなって思っています。」
子どもや保護者への関わり	学級会の前に、話し合いの対象となる児童や保護者と確認したり計画委員会の子供たちに今の学級の状態を見つめさせたりする。	No1 「何人かちょっと気になるとか、ちょっと関わりづらくなっていると言う子がいました。それでR男とも直接話をしたりこれは当事者同士の個人的な問題なのか、クラスみんなの問題なのかっていうのを担任として子ども達に投げかけたりしました」 No1 「自分もその子どもたちに話し合わせて解決して行った方がいいなあと思っていたのですが、R男からしたら個人的な問題だと思うかもしれないので、R男としっかり話をして、その後、お家の人にも、子どもたちで解決させていってもいいですかという承諾をもらいに行きました。」 No2 「学級会する時には、プランニングシートを使っているのですが、そのスタートのところ今のこの学級の状態をもう一回見つめて、子どもたちが自分の言葉で書いていくっていう部分がある。その部分からこの議題はスタートした」

表7 「この議題を話し合っって学級はどのように変わったのか」の概念、定義、具体例

概念	定義	具体例
学級会での理解	学級会では、話し合いの対象となった子供と、話し合いに参加した学級成員の想いを理解することができる。	No1「話し合いを通して、B 男は、気持ちが抑えられないことがあることや友達が減っていくのが怖いと思っていること、みんなと仲良くしたと思っていることが分かったことで、B 男の特徴というか特性っていうのをみんなと理解し合えた。」 No2「この学級会で他の友達の発言を聞いて、周りの子達の本気度っていうか、本気で怒っているなどが、これ以上したらもうだめだな、ここを越えてはいけないなど言うことをAは感じたんじゃないかなと思います。」
学級会後の変化	人間関係に関する議題で話し合った子供たちは、他の児童との関わりもより良いものにしようとしたり対象児への肯定的な見方に変化したりした。	No1「話し合いの後、問題解決のための集会活動へとつながっていきました。その集会では、R 男と関わることがメインではなく、これまで関わっていなかった人ともしっかりと関わっていきつつという目的の集会をしました。」 No2「その後Aは変わっていきました。また、Aが変わったのを『ニヤニヤしなくなったのが嬉しい』と帰りの会の中で言ったりAが変わったのを認めたりとか、掃除の場面とかで「お前今日頑張るとるやん」と声を掛けたりと、一部の子のAへの関わりじゃなくて、学級としてのAへの関わりというのがAの居心地をよくしたと思う。」
学級会での成長	学級会を通して学級の友達にしっかりと関わるようになったり友達がより良い方向へ変わったことを自分のことのように喜べるようになったりした。	No1「子どもたちの振り返りから、意識がしっかり友達に関わるとかに変わったことが分かる。R 男は、今、中学校と年生なんですけど、大きな問題もなくみんなと一緒に中学に行けています。あの学級会があったからとかではないかんですけど、今は、仲間外しとかは起きていないと思っています。」 No2「A自身が変わったっていうのもありますし、A自身を介して周りの子たちの動きがあったし、Aが変わることを周りの子たちも嬉しかった、自分ができるようになったとかではなく、友達ができるようになったことを一緒に喜べるようになった。卒業まで数ヶ月でしたけれども変わっていったように思います。そのことで、A自身が『頑張ろう』とか『あ、俺変わってよかったなって』言うことにつながっていったと思います。」

### 3 総合考察

この日の研修会の時に、教職経験がまだ2,3年の若年層の教員が、2人の担任が行った学級会を実施するのは怖いと話した。その理由が「学級の友達に迷惑をかけていることに気付いていない子供がいても、時間がない中でどの様に解決すればいいのかわからない。」ということだった。

子供たちの日常生活に見られる人間関係に関する問題を取り上げることをよしとする学級担任の指導観の違いであるが、特別活動の教育的な意義を今一度、教員養成の段階や初任者研修の中で理解させることも大切だと考える。

宇留田(1976)は「弱点や短所を持った人間が互いに励まし合って自己実現を図っていこうとする人間関係を、子供たちが自分達で築いていく時間が学級会活動だ」といっている。令和の時代の日本型教育として、個別最適な学びと協働的な学びが求められているが、今こそ、自分たちで自分たちの生活を見つめ、友達と協力してより良い生活を創造しようとする資質・能力を特別活動で形成していかなければならないと考える。

また、学級会の議題について教師が「何を話し合わせようか」「集会の議題が話し合わせやすい」

とか考えるのではなく、子供たちの朝から帰りまでの一日の生活の中や1学期から3学期という長いスパンでの学級生活の中での友達との関わりの中で生まれてくる問題を子供たちに気付かせ、学級会ができるような実践的な指導力を教師が身に付けていくことも大切である。このことが宇留田(1979)が言う「生活を見つめる眼を育てる」ことになると考える。今回、2人の担任のインタビューをM-GTAの手法を参考に分析を試みたが、分析法について更に理解を深めていきたい。

#### 引用・参考文献

- 木下康仁 2003 グラウンテッド・セオリー・アプローチの実践 弘文堂
- 文部科学省 2008 小学校学習指導要領解説特別活動編
- 文部科学省 2017 小・中学校学習指導要領
- 梶田叡一 1994 教育における評価の理論 I 金子書房
- 野中大輔 2022 児童の自発的、自治的な活動を促進する学級担任の実践的指導力向上 福岡教育大学教職大学院年報第12号
- 鶴田麻也美 2021 コロナ禍における特別活動の意識変化についての考察 昭和女子大 No.964 63~76(2021・2)
- 宇留田敬一 1976 学級会活動の改造 明治図書
- 宇留田敬一 1979 子供が生きる学級会活動 明治図書